

(16:00開始)

○部会長 それでは、ただいまより第1回の「平和のフロンティア部会」を開会いたします。

私は部会長として司会進行を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

なお、本日は御所用のため、池内委員、神保委員、高原委員、渡部委員は御欠席となっています。また、鈴木委員は30分ほど遅れられるという御連絡をいただいております。

それでは、まず野田総理から御挨拶をいただきます。よろしくお願いいたします。

○野田総理大臣 どうも皆さん、こんにちは。本日は「平和のフロンティア部会」の開催ということでございますが、まず委員に御就任をいただきましたこと、心から御礼を申し上げます。

我が内閣は、やるべきことというのは基本的には震災からの復興、原発事故との戦い、経済の再生という、当面国難とも言うべき課題を乗り越えていく、そういう役割があります。一方で、もう一つ、今、真剣に考えて答えを出していかなければいけないのは、このままで日本がいいと思ったら、私はこの国はじり貧に陥るだけだと思います。やはり先を見通して、フロンティアを開発して、そして未来を切り開いていくということ、現状に甘んじようということではなくて、まさに未来を切り開く勇気を持たなければいけないと思います。そのためのフロンティアを開発していくための知恵が、今、欲しいときであります。そういう意味から、幾つか平和のみならず部会を設置して、そういう御議論をいただくことになりました。

私が国家戦略会議の皆さんにお伝えしたのは、メンバー構成に当たりましては、なるべく私より若い人、なるべく女性を入れてほしい、あるいは地方に活動拠点を持っている方も入れてほしい、そういう要望をさせていただきましたところ、これは各界の知見を集めるだけではなく、若手の意欲のある官僚も含めて人選をしてほしいということでございましたが、お顔ぶれを拝見しますと、そういう構成になっているなということで、大変ありがたく思っている次第であります。

部会長を中心に、是非この「平和のフロンティア部会」においては、何と言っても我が国の繁栄と国民の幸福を実現する前提は、世界の平和と我が国の安全であると思います。それを実現するために望ましい国際社会というのはどういうことなのか、あるいはグローバルな課題においてリスクが発生することは当然これからも起こりますので、それにどう対応していくのか、そういうような視点も含めて活発な御議論をいただきたいと思ひますし、特にこれまでは大西洋の時代と言われていましたけれども、間違いなく、今、文明の中心、繁栄の中心は、アジア太平洋地域に移ってきているという中において、ほかの国は膨大なインフラ需要があったり、巨大な中間層がこれから出現する可能性がある中で、放っておくと我が国は其中で老化していく国、極東の片隅に位置するお年寄りの多い国で終わってしまいかねません。せつかく環境としてはいい環境にこれからなっていくときに、この日本がもう一回元気を取り戻すためには、私は1つにはルールメイキングに主体的に

関わることだと思います。

今、たとえの例で申し上げておりますが、例えばアジア太平洋地域において貿易や投資のルールをつくっていかうという一環で行いつつあるのが TPP であります。まさにアジア太平洋地域におけるルールづくり、貿易、投資の面でやっていかうということです。

もう一つは、EAS などでも主張させていただいておりますけれども、海洋をめぐるルールづくりについてもみんなで共有するということが大事だろうということなのです。特に日本の場合は海洋国家であります。排他的経済水域、管理できる水域は、面積で言うとも世界で6番目、深さも含めると世界で4番目、こういう国でありますから、まさに自分たちの特長を生かしながら、海洋をめぐるルールづくりにも深く関わっていく。あるいはアジア太平洋地域はこれから人口も含めて産業も活発になっていくと、エネルギー問題はどうかというときに、日本が低炭素型社会を主導する意味で、そして、エネルギー効率を改善するためにイニシアチブをとってルールをつくっていくべきだろうと思います。

そういうことも含めて、ルールメイキングにおいて日本が大きく関わることによって、日本も再び元気になっていく可能性は私はあると思います。そういう視点から御議論いただきたいと思いますし、今はちょっと水平的なスペースのフロンティアで申しましたが、フロンティアはまた立体的に見れば宇宙だってあるわけでありまして。衛星を飛ばせる国、ロケットを飛ばせる国、射場のある国、有人の活動ができる国、そんなにいっぱいありません。そういう優位性も生かしながら、これからの中長期的なビジョンというものを是非お考えいただければ大変ありがたいと思っております。

皆様のこれからの活発な御議論に強く強く御期待を申し上げながら、冒頭の御挨拶に代えたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○部会長 総理、どうもありがとうございました。

(報道関係者退室)

○部会長 では、今回第1回目の平和のフロンティア部会ですので、まず私の方から少しこの部会についての考えを短くお話をさせていただいて、その後、部会長代理から御挨拶を兼ねてお考えをお話させていただきたいと思います。別途、後ほど、私と部会長代理はプレゼンテーションを行いますので、今はごく手短かに申し上げたいと思います。

今、総理の方からかなり広範にお話をいただいたので、私の方で言うことが余りなくなってしまったのですが、私、今回のこの部会の長をお引き受けして、また本日お越しの大西先生が座長をされているフロンティア分科会というものの委員でもあるわけですが、そういう形のものをお引き受けさせていただいたのは、それほど日本の将来が明るいものかどうか、私自身はそんなに自信はないのですが、しかし、ここ数年の状況を見ると、パンドラの箱をひっくり返したように、日本にとっては厳しいことがさまざま起こってきたので、その箱に残っている希望というのを探すというのも悪くないなと思ったのが根本的な感じであります。

もう少し真面目に申し上げますと、この部会あるいは分科会の報告書として、2050 年を

1つのイメージとして持ちながら、2025年ぐらいまでの日本の政策について提言をすることで、今から10～15年ぐらいの日本の政策を考えるということだと思います。

私は戦後の日本の特に1970年ぐらいまでは経済を中心に経済計画というのが行われていて、所得倍増計画が有名であります。あのような形で経済の専門家を中心に衆知を集めてかなり真剣な議論をしたということは、実際の経済の動き、政治の動きがそれと即応したものでなくても、日本にとってはよかったことだと思います。やはり官僚、政治の世界は数年程度でしかなかなか動けないので、その先を見据えてどういう可能性なり課題があるかということを議論するということは戦後の日本にとって非常に重要だったし、いい経験であったと思いますので、今、日本はいろんな点で課題を抱えていることは皆さん御承知だと思いますが、逆に15年間こういうことをやるべきだという議論をするというのは、時宜にかなっていると思いました。

それとほぼ同じなのですが、今回、委員にお集まりいただいた皆さん、私がかねて存じ上げている方も初めての方もいらっしゃいますが、それぞれの分野で非常に優れた専門家であることは承知をしております。ですから、このテーマについても皆さんそれぞれの分野で、言い方は語弊がありますが、一家言、既にお持ちだと思いますが、短い期間であります。できるだけこの場を使って皆様の意見を戦わせて、より良いもの、皆さんのそれぞれが持たれているものからプラスαをつくっていきたいと思います。そういうことをすることでわざわざお忙しい皆さんに時間を取ってお集まりいただいている価値があると思いますし、また提言としても意味のあるものになると思いますので、私、微力ながら、そうした形で皆さんの御議論を活発にするというために、もっぱら力を使いたいと思います。

とりあえず私からは以上でございます。よろしくお願いします。

それでは、お願いします。

○部会長代理 部会長代理として補佐の役割をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

今、もう既に大体概略的にお話がありましたけれども、私の今の時点での考えというのを簡単にお話しさせていただきます。

まず今の国際関係において起きている事象というのは、2つのパワー・シフトという点から見られると思います。1つ目は、中国、インドなどの経済的な躍進によって、アジア太平洋地域が世界的なパワー・シフトの中心となっているという意味でのパワー・シフトです。

もう一つは、グローバル化の進展の中で、国家だけではなくてそれ以外の主体、例えば市民社会であるとか、企業であるとか、その他のさまざまな組織にパワーの移行というのが見られていて影響力が増している、そういう2つの変化というのが見られているのだと思います。

そうした変化が続く中で、2050年の日本の姿ということを考えてみますと、恐らく日本はもはや、いわゆる「大国」ではないのだと思います。客観的には中規模の、できれば中

の上ぐらいの国力として位置づけられるのでしょうかけれども、それでもなお元気な社会であり続け、そして今にも増して世界をリードするような国になるにはどうしたらよいのか。恐らくこの部会というのは、そうしたチャレンジングな宿題を与えられているのだと思っております。

現時点で私の方で考えている方向性として3つ挙げさせていただきます。まず1つ目としては、国力の基盤となる人口、経済力などを右肩上がりにするというのには限界が恐らくあるだろうと思われれます。しかし、できる限り維持し続ける努力ということは必要であって、この点に関しては他の部会との関係性というのが非常に強くなってくると思います。

2点目としましては、基盤となる安全保障というのを確保し続けるという、これは慎重さと一貫性というものが求められる作業であります。

3点目ですけれども、こうした前提の上に立って、限られた国力であっても、その資源を最大限に国際場裏における影響力に変換する必要性に迫られるでしょう。つまり国力にはある程度の限界があるのだけれども、それをいろいろな工夫をしながら影響力に変えていく作業が一番重要となってくるのではないかと思います。この部会ではそうしたさまざまな装置にどういうものがあるのかということを考える必要があるのではないかと考えております。

また後でお話いたしますとして、まずはここで説明を終らせていただきます。

○部会長 どうもありがとうございました。

それでは、ここで野田総理、公務の御都合で御退席されます。ありがとうございました。

○野田総理大臣 では、よろしく願いいたします。どうも失礼します。

(野田内閣総理大臣退室)

○部会長 続きまして、石田副大臣から一言御挨拶を頂戴します。

○石田内閣府副大臣 私は古川国家戦略担当大臣の下で、国家戦略を含めて内閣府の副大臣を務めております石田勝之と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今日は大変お忙しいところをこの「平和のフロンティア部会」にお集まりをいただきまして、政府側として心から御礼を申し上げる次第でございます。

先般、フロンティア分科会がスタートいたしまして、大西座長の下で4つの部会が行われることが決定いたしましたわけでございます。この会は先ほど御挨拶されました部会長、部会長代理の下で、平和のフロンティアということで皆さんからいろいろ示唆に富んだ御提言をいただくことになっております。

実は、私もこの内閣府の副大臣を務めさせていただいて5か月余り経つのですが、旧経済企画庁の4号館で随分会議を行い、私も座長を務めたり、いろいろ会議でこちらの方にお邪魔をさせていただいたことがあるわけではありますが、総理自らこの4号館に来られるというのは、私の記憶からすると初めてかと思っております。いかにこのフロンティア分科会に野田総理の肝いりがあるかという証左かと思っております。こういう分科会、また部会に総理が来て自ら御挨拶をするというのは、よほど日本の将来を憂いて、是非若い方

からも、あるいは女性の方からもいい提言、御意見をいただきたい、そういう思いがあってこちらの方に来たのかなと思っております。

そういう意味から、新しい視点あるいは将来に向けた観点から、是非示唆に富んだ御意見を出していただいて、6月へ向けて、部会長の下で立派な提言を出していただくことを副大臣として心から御期待を申し上げまして、御挨拶といたします。どうぞよろしくお願いいたします。

○部会長 どうもありがとうございました。

それでは、本日の議事の進め方について御説明申し上げます。今日は部会として第1回目ですので、部会の運営要領やフロンティア分科会、平和部会の趣旨、今後のスケジュールなどについて御説明をさせていただきます。その後、本日御出席の委員の皆様から自己紹介をしていただきます。

その自己紹介の後、私と部会長代理からプレゼンテーションを行って、その後、意見交換をさせていただきたいということでもあります。最後に第2回以降、皆様からプレゼンテーションをそれぞれ行っていただきたいと思いますので、プレゼンターをお願いをさせていただきます。全員分、今日決まればいいのですけれども、それは時間的にも無理かもしれないので、少なくとも次回についてはお願いしたいと思います。

それでは、まず運営要領について御説明をいたします。お手元の資料1、運営要領という書類がございます。分科会及び部会における配付資料及び議事要旨については、分科会・部会終了後、原則として公表する。ただし、分科会座長または部会長が必要と認める場合には、その一部または全部を非公表とすることができる。分科会終了後、座長または座長が指名する者が記者会見を行い、分科会の議事内容を説明するものとする。また、部会の議事内容の説明については、議事要旨の公表をもって代えるものとするということです。部会については記者会見はございません。

この運営要領に定めるもののほか、分科会の運営に関し、必要な事項は分科会で決定する、部会の運営についても同様とするということでございます。

部会の議事内容については、議事要旨の公表をもって代えますので、先ほど申しましたように終了後に会見の予定はありませんが、委員に個別に取材があった場合は、御自身の御発言の範囲で御対応をお願いするということをお願いいたします。

また、要領には明確には書いていませんけれども、議事要旨の公表については、当面は委員名は匿名とし、分科会、部会の活動すべてが終了した後、発言者の名前を記し、公表するという手続になっております。このような形で御了解いただけますでしょうか。

(「異議なし」と声あり)

○部会長 ありがとうございます。

次に、フロンティア分科会・平和部会の趣旨等について御説明をいたします。お手元の資料3及び資料4をごらんください。

資料3「フロンティア分科会及び部会における議論の進め方」、3枚つづりです。資料4

は「第1回フロンティア分科会大西座長説明資料」というパワーポイントの資料になっているものであります。

まず資料3をごらんいただいて、先ほど総理からもお話がありましたので、ここに書かれている分科会の使命等については改めて申し上げます。必要に応じてまたお読みいただければと思います。

2ページ目に4つの部会のそれぞれが書かれていて、この分科会というものの下に4つの部会が設けられています。繁栄、幸福、叡智、平和となっていて、本部会は言うまでもなく4番目の平和のフロンティア部会であるということでもあります。

その内容についてもここで読み上げることはいたしません、先ほどお話があったような、いろいろな国際環境の変化というもののなかで、日本の外交、平和政策といったようなものを検討するというのが趣旨であります。

その次の3ページ目、今後のスケジュールとございますが、こちらは日程が入っておりません。日程が入っているものが取扱注意として別途配布されておりますが、取扱注意の方はホームページに公表されないというものであります。これについてはただ単に予定の日程が入っているというだけですので、それほど大きな情報があるわけではないですが、とりあえずこちらの元の方を見ていただきまして、本日第1回ということで、5月までに第8回まで開催するというのが予定になっております。皆さんの御予定をお伺いして、第6回までは平和部会の方も日程が決まっているかと思っております。

左側のフロンティア分科会というのが大体1か月に1回ぐらい開催されるという予定になっておりまして、この平和部会での議論、各部会での議論の進捗状況をフロンティア分科会で私と部会長代理の方から御紹介をして、それぞれの部会の議論をすり合わせる、あるいは議論をするという形で進めていき、第3回、4月に入るぐらいまでに部会としてのある種の方向性は出すということが今の期待されていることであります。

そして国家戦略会議というものが総理を中心にしてありますので、そちらの方でも大西座長の方から御披露があるというようなことだろうと思っております。そういう形で5月には中間報告を公表するという形で、更にそれを修正して6月には最終報告、とりまとめというような段取りになっております。

大変短期間で、私自身そうなのですが、御自身のお仕事がおありの中で時間を割いてこちらに来ていただき御議論いただく、あるいは文書をつくっていただくというようなこともあるかもしれませんが、先ほど総理の意気込みもお話がありましたように、是非とも皆さんのお力をお借りしたいということでもあります。

スケジュール、日程については、先ほど申しました取扱注意の方のスケジュール（案）というもので一応御説明をしております。

とりあえず私の方から、この部会の運営あるいは分科会の性質について、簡単に御紹介をしたいと思います。

中の方はまた皆さんごらんいただいて、とりあえず表紙をめくっていただいたバックキ

キャストイングアプローチという、ここだけ見ておいていただければと思います。今の日本はたくさん課題を抱えていることはもう明らかなのですが、本分科会あるいは部会においては、まず 2050 年ごろという今から 40 年先ですので、かなり先なのですが、その時期の将来像というのを何らかの形でイメージをするということを前提にしています。順番から言うと①、②、③、④ですから、まず現状でこのまま進むとどれだけ困ったことになるかということも考えるということです。余り考えたくないのが私の気持ちですけれども、一応それを行った上でそういう状態を変える、あるべき 2050 年での日本ないし日本をとりまく国際環境という将来像を考えていただいて、その上で 2050 年までだとさすがに長いので、先ほど申し上げたように 2025 年ぐらいまでに日本が、この 2050 年のあるべき将来像に向けてどういうことをやる必要があるかということについて具体的提言を書くということであります。

現状の課題、議論にとらわれずに大胆な発想をと一方で言われているのですが、他方でリアリスティックな非現実的なものではないようにしてほしいということもありますので、これも正直私は現時点ではそんな都合のいいアイデアは正直持っておりません。皆さん方の積極的な御意見を期待するということであります。

それ以下のページは皆さんいろんな形でごらんになっている資料もあると思いますし、新しい知見もあると思いますが、時間の関係でここでは省略させていただきます。また改めてごらんいただければと思います。

それでは、早速ですけれども、各委員の自己紹介に移りたいと思います。先ほど申しましたが、コメントを御提出いただいた方には、コメントのさわり、そういうことも含めて御紹介をいただいてもいいですし、また先ほどの総理の御発言等についての印象でも結構かと思います。時間の関係上、御発言はお一人 3 分程度でお願いしたいと思います。

もう私の方で席順ということで順番に御指名をさせていただきますので、まずこちらからお願いいただけますか。

○委員 どうぞよろしくお願いいたします。

このコメントを書くということで、実をいうと 2 つの点でとても苦しみました。時間的な制約と、あと、やはり記者というのは非常に短視眼的に動いているのだなということを改めて自分で痛切に感じました。25 年とか 2050 年とか、もうとても先の話で普段視野の中に入っておらず、この委員会にどのくらい貢献できるのかなと、自信を最初からなくしております。私のコメントには足りないものがあると自覚しつつ出しました。記者としては政治部の出身で、遠い先の人口問題とか経済の展望ですとか、そういった分野がふだんのカバーとかなり遠く感じられます。先ほども野田首相が御挨拶をされたときも、二十年近く政治記者をやっていると、総理がしゃべっているときは必ず逐語でメモをするという癖が付いていまして、今も全部逐語でメモをとってしまいまして、これはどこがニュースだろうなと思って、そちらを書こうと自然にマインドが回っているというか、これが多分総理が言いたかったことだとか、そういうスキルは非常に本能的に動くのですが、自分

で能動的に、これからの 2025 年、2050 年どうしようかということについては、なかなか難しいです。

私の専門というか、ずっと追ってきたものは外交と安全保障とっております。日米同盟などについて専門的に報道してきたつもりですので、そういう分野と、あとはこれからの中国のことなどを考えながら、何かお役に立てることをさせていただければと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

○部会長 ありがとうございます。

それでは、次の方、お願いします。

○委員 はじめまして。

まずは委員の皆様の名簿を拝見しまして、すごく緊張しておりますけれども、どうぞよろしくお願いいたします。

私は、看護師でありまして、日本看護協会というところに所属はしておりますけれども、これは一方の顔で、多分違う方の私でこちらに座っているのかなと思っているのですが、国際緊急援助隊ですとか NGO の活動などで災害支援をしてきておりまして、去年の東日本大震災でも 3 県の支援を取り仕切ったというようなことが評価されて委員に選ばれたと認識しております。

アカデミックなことよりは、多分現場の実務的なところでいろいろ知り得ていることがあるかなと思いますので、そういった点において是非発言させていただければと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

○部会長 ありがとうございます。よろしくお願いします。

そうしましたら、次の方、お願いします。

○委員 よろしくお願いいたします。

機会あり様々な国で私が生活、勤務して身に染みて感じたのは、人間にとってコミュニケーションがいかに大事かということです。今回の部会で皆さんと議論し、2050 年の日本について考えていきたいと思いますというのはまさにその最たる例だと思いますが、人と人がインタラクト、交流することによって新しい価値が生まれる、対話によって多くの問題を解決し得るというのは私自身も短い人生の中で感じているところです。

国同士の関係、外交もまたその例外ではないのかなと考えております。私は東アジア、環太平洋諸国間の対話の強化は不可欠と考えます。対話が平和を創り出すと言うのはいささかナイーブに聞こえてしまうかもしれませんが、例えば私自身も欧州に延べ 8 年間生活するなかで、これこそが様々な問題を乗り越えようとする欧州の力の源泉ではないのかとつとに感じたところであり、また東アジア、環太平洋諸国間においても今後求められている方向性ではないかと感じます。

○部会長 どうもありがとうございます。

次の方、お願いします。

○委員 よろしくお願ひいたします。

私はふだん、外交安全保障について幅広に研究したり提言したりするということを会社でやっているわけなのですが、その一環といたしまして、昨年それこそ日本のグランド・ストラテジーを考えるという研究会の報告書を出しまして、1月にはそれを本という形で出版しました。ただし、フロンティアという切り口でそれをまとめたというわけではありませんし、なかなかほかの繁栄とか幸福とかの分野で違って、平和のフロンティアというのはそもそもどういうものなのかといえますか、より望ましい平和というものが有り得るのかという、ある種、哲学的な課題にも踏み込むことになるのかもしれませんが、けれども、そういう検討もしていきましましたので、そういうものを生かしていければと思っております。

その検討の中で非常に大きな課題でしたのは、パワー・シフト、特に主要国間でのパワー・シフトということで、これをどうやって乗り切るかということでした。我々の検討はどちらかというと2025年の方にフォーカスをしておりまして、2050年までは考えていなかったのですが、多分2025年ぐらいまでがパワー・シフトとしてはきついのかなと。ある意味2050年というのはその先にあるわけでございまして、そういうもの、タイムフレームといえますか、そういうものをどう考えていいのかなということも悩みながら、このコメントというものは書かせていただきました。

なかなか国際政治のシナリオというのは、現状を延長していった1つのシナリオになるかというところでもなくて、延長する中でも幾つかのシナリオがあり得るし、その中でも非常に大きな、例えば朝鮮半島の統一ですとか、そういう大きなイベントがあったらまた非常に振れてしまうということで、1つの例えば2050年のシナリオを前提として望ましいシナリオというものではなくて、複数のシナリオを想定した中で望ましいものはどういうものなのかを考えていくことも必要なのかなとは思ったりしております。

以上です。

○部会長 ありがとうございます。次の方、お願いします。

○委員 私も公務員の枠でこちらに参加させていただきまして、ふだんの業務ですと事務方でこういうものに参加というか関わることは多々あるのですが、こういう立場で参加させていただくのは初めてですので、非常に光栄であるのと、ちょっと緊張しております。

今、私の仕事としましては、中国を中心としたアジア経済の分析をしておりまして、毎月1回、月例経済報告という景気判断を毎月政府として出すという業務のうちのアジア部分を担当しておりまして、日々、アジアの変化というものを見続けてきております。

少し前は、2年間中国の大学院に留学をさせていただいておりまして、中国のイノベーション政策ですとか技術革新について研究をしてまいりました。学生のころから中国とアジアに非常に関わってきたのですが、今も中国、アジアの動きを日々見ておりますと、非常にダイナミックな動きをしておりまして、本当に毎日わくわくしているのですが、日本もアジアの一国でありますけれども、相互に補完の関係に、経済関係だけで

はなくいろいろな面でお互いにギブ&テイクでできるものがあるのではないかと考えております。お互いにそれを最大限にギブ&テイクすることによってポテンシャルを最大限に引き上げて、より繁栄したアジアと日本をつくっていけないかなと思って、今後 2050 年までどういうふうに日本やアジアが変化していくのかというのを考えるとわくわくするところがあります。

知識も経験も全然乏しいのですけれども、こちらで勉強させていただきながら、できるだけ議論に貢献させていただきたいなと思っております。よろしくお願いいたします。

○部会長 ありがとうございます。

それでは、次の方、お願いします。

○委員 私、一応専門としては、自分は何が専門かというのとはっきりしていないのですが、国際政治経済学というのが一番広い範囲でありまして、政治、安全保障、外交と経済と技術が絡むようなテーマというのをこれまでずっと扱ってきまして、主には宇宙開発の問題をやってきましたが、最近では船橋洋一氏がやってらっしゃる民間事故調の方で、福島第一原発の事故の検証の原子力行政の部分についての研究というのをやらせてもらっていたり、あと地域的には専門がヨーロッパですので、現在の EU の金融危機の問題もありますけれども、それ以上に EU が持っている規制のパワーというか、規制をつくっていく力、グローバルスタンダードをつくっていく力というところにも着目して、近々それについて編集した本も出るようになっております。

ですので、フロンティアといっても平和のフロンティアについては、私は平和の専門家ではないのですが、広く外交安全保障、国際関係という観点から何らかの貢献ができればと思っております。よろしくお願いいたします。

○部会長 ありがとうございます。

次の方、お願いします。

○委員 3つ申しますが、その前に自己紹介的な話をいたしますと、2005～2008 年まで外務省で飯を食いました。外務省で大きく言うと大国派と中規模派という 2 つスクールがあるということに気がついて、中規模派というのはある意味リアリズムなのですが、日本はまだ大国ではないのだと思う人たち。中規模高品質国家などということを行った人もおります。

一方、大国派は霞を食っているかということとそうではなくて、アスピレーションです。大きくなりたいと思わないと今のままですらいられない。イチローは上へ上へと目指し続けたからこそイチローになったのであって、今の日本のプロ野球でいいと思っている者は能力が幾らあってもイチローにはなれない、こういった話。

「自由と繁栄の弧」というスピーチの作成に携わったのですが、これは大国派でありまして、日本の外交の地平を一気に広げたいと思った人たちの作品です。

次に、3つ申し上げたいうちの 1 つ目というのが、この部会は自画像に関わるエクササイズだろうということでありまして。40 年も先の自分の自画像を描けと言われても、私はそ

のときには死んでいますからできないのですが、自分の子どもなら十分生きている。しかし、私の子どもなど誰も知りませんから、皆さんよく御存じの前田敦子が還暦を迎えるころどうなのかということでエクササイズをやってみました。それがわたしの提出したコメントの切り口です。

言ってみれば日本の 40 年後、自分はどんなふうでありたいかということは、アスピレーションでもあり、リアリズムでもある。いずれにせよ自分はどうなるかという自画像を見るとエクササイズなのだろうと思います。

2 番目、これは多分この部会での私の立場ですが、いっそのことリアリズムに「ど」の付く「どリアリスト」でいきたいと思います。といいますのも、日本は本当ならポストモダンの世界でグローバルイシューだけやっていたい国なのですけれども、周りの国たちが超モダン国家ばかりでありますから、好むと好まざるとにかかわらず、これからは超モダン国家としてのぎを削らざるを得ない。そうしますと、しばらくは「どリアリズム」でいきたいというのが私の立場であります。

3 番目は言葉です。野田総理は御自身の言葉を大事にされる方だと思いますが、この部会に入ろうかと思った最大の理由は、百里基地での野田総理の演説でした。自衛隊に向かってあれだけの言葉を投げた総理大臣は多分戦後の歴史にいない。私はこの部会・分科会の報告というものが、国民に希望を示す強い言葉になって出て行ってほしいと思います。この 40 年からバックキャスティングするという手法、大変斬新ですし、言ってみれば商品性に富んでいるということもありますから、これに面白い見出しを付けて、こんなふうでありたいなということを多くの人たちが自問自答するという結果を出してほしいなと思っています。

以上です。

○部会長 どうもありがとうございました。よろしくお願いします。

次の方、お願いします。

○委員 私、こういう類の会議、もう古くは麻生政権の時から延々といろいろなことをやっているのですけれども、日本が変わらないうちに世界がどんどん変わるのを実感しています。私はもともと TPP とか日中韓 FTA とか、自由貿易協定の話は今でもやっているつもりで、この会議と直接には関係ありません。しかし、この会議の主たるメッセージは、とにかく先のことを考えよう、昔はどうだったとか言っている場合ではないということで受け止めてきました。ここしばらく、やはり日本に最も欠けてきたものというのは、ダウンサイズする戦略がなかったということだと思うのです。どんどん押し流されて小さくなっただけであって、自分が能動的にダウンサイズしていないので、常に人が言われたことにレスポンスに対応していくだけ。そして結局それが自分の中でいろいろ分裂していくというのは当たり前の帰結なのです。

さすがにここでコンセンサスがないと、本当に危険なところに来ているというのが、地震、原発ときて政治家の皆さんたちもようやく感じておられるのかなと受け止めました。

将来に向かってどう考えていくかというときに、恐らくどの国でも一番言われるのは人口動態の話で、今回のことでも非常に人口動態の話がベースになっている、消費税もあるのでよけいそういうものになっているのかと思うのですけれども、私は余り人口だけで考えるのはいかなものかと思っております。特にアジアの場合、別に高齢化しているのは日本だけではなくて、もう中国の人口ボーナスは来年に終わるわけで、中国は世界の大高齢大国になって行く、ということです。ほかのアジアも高齢化しないのはインドネシアとフィリピン、インドしかないです。あとは韓国もシンガポールも超高齢化社会になって行く、ということなのです。

ただ、一応、私、現代韓国朝鮮学会会長なのですけれども隣の国は統一している場合には日本より人口が大きくなっているということもあり得るでしょう。これは歴史的な力関係の逆転となります。というようなことがあるのですけれども、余り人口だけ、というのもどうかと思うのです。特にこれから私たちが直視しなければいけないのは、人口動態とも関係のある二つ、1つは環境制約、もう一つはエネルギー制約があると思います。そしてさらにもう一つのフロンティアとしては医学のフロンティアというのがあるのではないのでしょうか。人間はただ死なないで生きているというだけであれば、死なない時代というのが来ると思えます。細胞でも何でも悪いところはどんどん取り換えれば、しばらく生きてしまうのかもしれない。そしてそれと全く反対のモーメンタムとして、例えば資源制約から来るパンデミックの可能性のようなものを爆弾のように抱えていると思います。少しこういうのを考えてみないと、人口が大きな新興国はみんな明るい式の投資銀行のあおりに乗ってしまうだけのようには思えます。実際には人間の歴史で人口が祝福だった時代は飢えとの戦いという意味ではすごく少ないのです。人口は常に重荷で、良くて失業者という重荷になっていたわけです。宝になるのですけれども、成長しなくなったときは単なる重荷なのです。

特に中国などを見てもそうですけれども、やはり巨大に労働参入人口がいるので、これを食わしていかなければいけないという圧力には非常に大きなものがあります。しかも都市化して密集したところにパンデミックのようなことが起きてしまった場合、人口は逆に巨大リスクになって行くわけです。だから、人口は祝福（ブレッシング）で、逆に人口が減ってきたらブレッシングはないという、そういうテンプレートはいつも正解とは言えないでしょう。

あと新興国の時代も、結局 2040 年が今の状況の単純延長では考えられないと思うのです。今の過渡期がしばらく津波のように行ったり来たりしながら、終わって新しい水平線が恐らく見えてくるということになるのではないかと思います。幸福な家庭はみんな同じだが、不幸な家庭は多様、というように、G7 の考えていることは似たようなものですが、G20 がまとまらないというのは、新興国がみんな違うからなのです。唯一共通する価値観は、先進国が無理やり強いてきた 19 世紀以来の秩序を自分の好きなように塗り替えたい、歴史も変えたい、領土も変えたい、この欲望だけはみんな持っている。しかし

だからといって、みんなでそれに向かって一致するという共通の価値観がないので、てんでんばらばらな状態が続いていく。

こういうのは地政学的に横にこういう人たちがいっぱいいる中を突き抜けていかなければいけないので、その過渡期が一通り終わって、特にアジアが抱えている、豊かになる前に年を取ってしまうかもしれないという問題の後に多分 2050 年というのは来るかなということだと思います。よろしくお願いします。

○部会長 どうもありがとうございました。今、皆さん、大変時間の限られた中でしたけれども、さすがに面白い私見を既にお話をいただいたと思います。後でもまた御相談申し上げますが、次回以降、皆様からのプレゼンテーションで更に深い議論をしていただければと思います。

また、先ほど来の繰り返しですけれども、限られた時間、大体毎回 2 時間のセッションということになってしましますが、できるだけ皆さんの意見を戦わせるという場を増やしていきたいと思います。ですから、A 委員の言われたことに全く違う観点で話をされるということについて、どうぞ御躊躇なくお話をいただいて、最後は何らかの形で報告書にまとめないといけないので、それはそれで御相談ということですが、できるだけいろんな角度からの視点で御議論いただきたいと思う次第であります。改めてありがとうございます。

それでは、私と部会長代理の方からプレゼンテーションをそれぞれ 15 分程度とされておりまして。ですから、合わせて大体 30 分程度のプレゼンテーションで、その後、意見交換ということで本日の会議のほぼ終わりまでまた御発言をいただければという段取りになっています。

資料 5 が私の提出資料ということで、資料 6 が部会長代理の提出資料ということになっています。私の方からお話しさせていただきますが、もう既に繰り返しお話があって、先ほど委員の方からも人口にとられすぎるなという御注意を受けたばかりなので 15 分も使ってお話をする内容はないのですが、とりあえずキックオフでもありますので、ボトムラインということで私の今の時点での考えをお話しさせていただこうかという資料であります。

改めて言うまでもなく、最初のページに書いていますが、2050 年までは大きな移行期だととらえることができるのではないかと思います。中印を中心とした世界人口の大半を占める途上地域が産業化を進める一方で、情報社会化なり高齢化が進む先進社会は停滞をするというイメージかと思っています。

その過程で、既存秩序にはさまざまな矛盾が生じることがある。いろいろな資源の分配ですとか富の分配ですとか、国際秩序における発言権ですとか、そういうものについて力による解決が求められたり、誤算により武力紛争が生じたりする可能性も存在するという、かなり難しい半世紀になるではないかというのが私のイメージです。

仮にこの条件、例えば既に今年についてもイランをめぐる軍事的な紛争の可能性がゼロではないわけですし、あるいはパキスタンなどの状況を見ても、これから何年かの間に

核が使われる戦争が起きる可能性も否定はできないのですが、そういうようなことがとりあえず限定される、回避されるということで大きな破綻なく進めば、21世紀の後半はより安定した調和のとれた世界となることが期待できるのではないかと。

例によって人口なのですが、2ページのところに人からの引用でお恥ずかしいのですが、けれども、2100年までの人口推計という国連などの推計値が出ていますが、既に世界人口の増加スピードというのは、20世紀に比べて21世紀は随分落ちているのですけれども、母数が多いので2050年から2060年ぐらいまでに中位推計で90億人ぐらいになるということです。かなり世界人口が今の70億ぐらいから20億ぐらいということで増える時期ではあります。しかし、その後、2050年から2100年には世界規模で人口が停滞してくるという時期ですので、90億を超えた辺りから2100年には100億ぐらいということです。70年、80年先の出生率とかそういうものをそれこそ医学の発達とかそういうことも考えれば、この21世紀後半の推計は勿論余り当てにならないわけですが、21世紀の前半に比べると21世紀の後半は比較的安定するかなと考えた1つの根拠であります。

この中で数は書いていないですが、アメリカは先進地域の中では人口を増やしていきますし、特に労働人口が増えていくので、2050年ごろでも世界をリードする存在であろうと思っています。ただ、ヒスパニック以外に非白人というのが人口の半分ぐらいになって、ヒスパニックが20%ぐらいになるということです。アメリカ大陸の一国家、中南米とより近い存在になっていく可能性もあるし、いろいろな形でアメリカの価値観、世界との関わり方は2050年には変わっている可能性があるとは思っています。

アジアにおいては、先ほどもお話もありましたが、主権国家への愛着というのが非常に強い、ナショナリズムが強いわけで、領土をめぐる紛争とか歴史認識をめぐる紛争というのがなかなか収まることなく繰り返す起きるということでもあります。

やはり今後のアジアの国際関係を考えたときに、こうした主権国家への強い愛着とナショナリズムが続く限りは、対立の解消というのは困難であって、将来的には一定程度の脱主権化、領土なり国民意識といったようなものを相対化していくようなイデオロギーなり考え方というのが地域において共有されていくということが望ましいのではないかと思います。日本はその点では、この地域に対してそうした思考方法の転換というのをいろんな形で伝えていく、あるいは共有していく方策を持つことができるのではないかと、1つのイメージです。

もう一つは、これもまた人口なのですが、いわゆる人口ボーナスという考え方も幅があると思いますが、例えば2010年代から2030年代にかけて、東アジアでは先ほどお話もありましたが、中国、韓国は10年ぐらい前の日本と同じように人口ボーナスを失って、むしろオーナスの段階に入ってきているということです。東南アジア地域は比較的まだ伸び代があって、それでも2030年代には東南アジア地域も人口ボーナスは終わってくるということのようでありまして、それ以降、そうした人口的な変化というと、アメリカがやや特殊なのですが、アジアについて言えばインドから西の地域というのが順調にいけば成長

の中心になっていくという可能性があるだろうということでもあります。

ですから、2050年という時代をイメージすると、今、アジア太平洋が中心だという意識が高まっていますが、2050年という時代を考えると、日本だけではなくほかの国でも成長は終わっており、むしろ日本が今抱えているような問題を中国、韓国あるいは東アジアの国々が抱え、成長の中心はインドから更に向こうということになっている可能性が結構あるということではないかと思います。

他方、2050年までの間に、今、既に世界を動かしている情報社会化という現象が更に進んでいって普遍的なものになるということはまず確実だと思います。これも2050年になんかということになっているのか皆目見当が付きません。例えばこういう会議をバーチャルリアリティでできるようになっているとか、紙の本などというのが全くなくなっているだとか、そういう可能性もあるかもわからないですし、全く予想はつきません。しかし、世界がそういう意味で普遍的な文明を共有している可能性はかなり高いのではないかと思います。

他方で、18世紀ないし19世紀以来の、西洋が世界の文明をリードし、他の文明は遅れた、あるいは消えつつある文明であるというかつてあったイメージは否定されて、複数の文明圏が並立をし、恐らく宗教的な価値観というものも21世紀の中ぐらいにはなくなっておらず、むしろ異なる宗教、文明観というものが世界の中で並立している状態が強い気がするということでもあります。

そういうイメージの中で、日本について、余り私はアイデアが働きません。2050年までの間だと、米中の中にある国という位置づけが基本となるということは動かないのではないかと思います。地勢的には、日本とその近接エリア、朝鮮半島ないし台湾エリアのような地域が敵対的な勢力に支配されないことが生存のための外交目標になるかと思います。

また、今のトレンドで行けば、それほど遠くない将来に日本は経常赤字国になるだろうと思うのですが、2050年までにはまたそれが更にひっくり返ることがあるかもしれません。一定の経済的な自立性を保つために、食料やエネルギーについては日本及びコントロールしている海洋あるいは周辺地域の開発によって自給性を向上させることの必要度は過去数十年よりもより大きいのではないかと思います。

その上で、日本が固有性と発言力を世界、国際政治の舞台で確保していくためには、いろんな国との良好な関係あるいはいろんなアクターとのネットワークを使って味方を多く持つことで、自らの足らざるところを補うというほかないであろうと思います。

最後に、人口について、3ページと5ページ、5ページが最近出た社会保障・人口問題研究所の人口推計に基づくピラミッドで、2050年のピラミッドはこういうものであるというのは前から知っていたのですが、1つには、よほどの大きな変化がないと、2050年にこういう形になることは変わらないだろうと思います。大戦争であるとか、大パンデミックであるとか、大規模な人口移動といったようなものが起きないとかいうものが変わることはなくて、こうした逆三角形型のピラミッドというのは、世界史上にも非常にまれなの

ではないかと思います。

勿論、老人が働くとか、女性が働くとか、省エネルギー、ロボット、いろんな発明、工夫といったようなことで、変わる可能性はあります。高齢人口が社会の一員として活動する可能性はあると思いますが、それがどこまで行けるのかは今のところ検討がつかないので、かなり厳しい人口構成だというのが私の印象であります。

それを含めてほかの部会で議論されるような国内課題が解決されるか。例えば、日本の防衛費は現在 GDP の 1 % 程度ですが、それをより大きく増やした方が日本のためにいいという話に仮に我々の部会でなったとして、それが可能かということになると、やはり財政状況の話になるわけです。それは ODA やその他のことについても同じであり、そういう問題についてある種のイメージが持てないと、特に投資を必要とするような政策提言をするのは難しいというのが、私の今の時点の直感的イメージであります。

そのほかの図表については見ていただいたら結構かと思います。3 ページにありますように、日本はとりわけ高齢化度が高く、高齢化イコール悪ではない、マイナスではないという考え方をとるべきなのかもしれないのですが、かなり特異な状態であると思います。2 ページ、4 ページの図表について、2050 年程度、あるいは 2100 年になると、先進国、東アジアだけではなく、アフリカ、イスラム圏が経済規模、人口規模等ではかなり大きくなっており、これは考慮に入れるべき将来像かなと思います。

続いて、どうぞ。

○部会長代理 現在の延長線上にある 2050 年ということで考えてみました。平和・安全保障という観点から、2050 年の日本というものをシミュレートしようとすることは非常に難しいのですが、それはあまりに多変数であるからです。これは日本の国内の事情だけでは決まらず、国際政治の中で他国がどう動くのかといったことによって変わってくるということです。しかし、少なくともここでは 2 つの側面から、つまり、1 つは国際政治の構造変化、もう一つは日本の国力の土台という 2 つの側面から見ることはできるのではないかと思います。

先ほどから挙がっておりますゴールドマン・サックスのレポートがございますが、そこでいわゆる BRICs 諸国の経済的躍進ということが述べられておりますけれども、それだけではなくて、実際にその後さまざまな国力の観点から、つまり、経済力だけではなくて、軍事力、技術力、そういうものを総合して見たときに、今後パワー・シフトが進んでいくだろうと思います。今は中国が非常に目立っておりますけれども、中国だけではなくてインドも含めて、これから大国の力というのが変わっていく可能性があるということが指摘されるわけです。その重心にあるのがアジア太平洋地域であり、少なくともこれから数十年に関してはその傾向が続くだろうと考えられます。

こうした変化は、日本がこれからどのような平和と安全保障の政策をとっていくべきかに関連するでしょうし、広い意味で世界の平和というものに日本がどう貢献すべきかであるとか、広い意味での国際的なカバナンス、それは経済、金融、環境、広い意味での安全

保障の領域を指しますが、こうした分野での日本の関わり方というものに影響してくるであろうと考えます。

2つ目の側面ですけれども、日本の国内状況ということを見ますと、先ほど人口は必ずしもブレッシングではないという話があり、確かにそういう側面があるのですが、同時に恐らく少子高齢化の側面、特に少子化に関しては、国内政策によってある程度今よりは改善することが本来できるはずではないかというのが私の考えているところです。

少子高齢化の問題があり、これからより厳しい世界的な経済競争にさらされる。その中で日本の国力というのはもはや右肩上がりではないだろうということが、ある程度想定されるわけです。

こうして見ますと、1点目としましては、日本の国力というのは相対的に見たときに低下せざるを得ないだろうということが言えます。2050年の日本は、国力において恐らく中位の、つまり大国ではないという意味なのですが、大国ではない諸国に位置するであろうということが考えられます。ここで中位であるとか大国とかと言っているのは、大国的な外交スタイルをとるとか、中規模の国的なスタイルをとるとかそういう意味の話ではなくて、客観的な国力という意味での話をしています。

こうした、ある程度の国力の相対的な低下を前提としますと、日本が無事に生き残って、かつ、総理から話があったような「世界のフロントランナー」となることを目指す上では、相当の努力と工夫というものが必要とされると考えます。

もう一つですけれども、国際的なパワー・シフトは日本の安全保障に対しても、恐らく再考を促すであろうということです。ここで再考というのは、今までの路線から脱するという意味ではなくて、もう一度考えることを必要とするであろうということです。それはアメリカを基軸とした既存の同盟を維持していくのか、新たな大国との連携に変更するのか、いずれからも距離をとりバランスをとるのか、あるいは自分自身の安全保障力を強化するのかということですが、これらは相互排他的なものではなくて、組み合わせが当然できるものです。こうした問題を正面から議論する必要性が出てくると思われます。

3点目としまして、新しい大国の力が十分なものとなってきて、かつこれらの諸国が現行の国際秩序に不満を持つような場合がもし起きるとすれば、秩序変更を迫ってくるだろうと考えられます。そのための対応方針を日本は用意する必要があるのではないかとすることも考えられます。

これ以外にもパワー・シフトという観点では、市民社会であるとか、いわゆる国家以外のアクターへのパワー・シフトも進行していくので、それがもたらす影響も当然考える必要があると考えます。

これが前置きなのですけれども、次に目指すべき姿ということで、現時点で思い浮かぶ案をお話します。

まず1点目としては、日本の安全保障を高めるために、今の時点で想定できるアメリカなどの友好国と協力しながらやっていく必要がある。ここで安全保障を高めるというのは、

単に軍事力を増強するという話ではなくて、もっと広い観点から考える必要があります。

2点目ですが、中規模の国が安全に生存し続けるためには努力が必要です。そのためには、外交力の向上というのが必須となると考えます。すなわち、国力として限られた資源を最大限に影響力に変換するための装置として、先ほども申し上げましたけれども、そういったものが必要だと思います。

目指すべきは、国力がある程度限られていても、外交では「大国」あるいは「重要な存在感がある国」となるということであると考えられるわけです。その際に、「地域や世界の平和という公共財に貢献することができるような国」、そして、そうした志向性を持つ国と連携していくことが必要であると思います。

もう一つは、世界大に見たときに、より正統性の高い価値や規範を推進し、リードする国となるということ、そのように見られるということが大事であると思います。

もう一つ挙げますと、「世界にたくさん仲間がいる」という少々幼稚な言葉で書いてしまいましたけれども、いかに「仲間づくり」をしていくかということが重要かと考えます。この際の仲間とは表面的な仲間ではなく本当の仲間ということです。実際にさまざまな決定や実行をするときに支持してくれない仲間では困るわけです。そのような方向性を目指すべきではないかと考えます。

最後になりますけれども、このような点を実現するために 2025 年に向けていかなる領域を新たに切り開くことが必要かということで、重点領域として幾つか挙げました。

まず1点目としまして、これは 2025 年に限ったことではないですが、国益の客観的な評価に基づいて、外交にある程度の一貫性と継続性を持たせることであります。

2点目としまして、戦略的な重要国との二国間外交の立て直しです。

3点目としましては、多国間（マルチ）の外交の強化です。例えば国連、アジア太平洋などの枠での特に人的なネットワークづくりが不可欠であると考えます。多国間に関しましてはバイとは異なる戦術、制度的支援が必要となっております。ヨーロッパ、北米の連携は非常に強いものがありますので、ここにいかに入り込んでいくかということ、マルチ外交のハブとなっている中小国群といかに連携していくか、そうした非常に細かな外交の術というものがこれから必要になってくると考えます。

あとは国際機関に優秀な邦人の人材を送り込むということがあります。それを言うのは簡単ですが、実際には大学、大学院教育の段階からの訓練も必要とされることで、制度的な支援が必要となってきます。

幾つか配布しました論点を飛ばしますが、日本が国際的に提唱して、そして正統性を持って受け入れられるような価値や規範を推進する、知的なリーダーシップが必要です。ただ、そのためには民間、市民社会から、官からのインプットというのは必要となると考えます。

最後に2点挙げさせていただきます。1つは外交上の価値やアイデンティティを今よりも明確にしていく必要があるのではないかとということです。それは日本社会自身がよって

立っている民主主義や人権といった価値をこれからも推進していくということであり、これを共有する諸国との連携を一層図るべきであると考えます。ただ、その際に、こうした価値を原理的なものとして主張するというよりは、より他の諸国が受け入れやすいような形でいかに調整していくか、そこに日本の手腕というか過去の経験というものが役に立つのではないかと考えます。

最後に、新興大国が現行のグローバルな秩序の価値や制度をどういうふう理解して、どのような変更を求めるのかということ予測し、精査した上で、これらの諸国に参与することで日本や世界の多くの諸国にとって望ましい国際秩序の維持や形成に貢献するという役割、これは非常に難しい作業であると思いますが、こういったことが必要ではないかと思ひます。

以上です。

○部会長 どうもありがとうございました。短時間に大変いろんな論点をカバーしていただいて、非常に結構だったと思ひましたが、とりあえず2人、プレゼンテーションをしました。

本日、最後の5分程度で次回以降のことを御相談したいと思ひますので、それまで大体30分程度議論の時間がござひます。今のプレゼンテーションあるいは皆さん方の御発言についての御意見でもいいですし、また触れられなかった論点として重要なものでもいいと思ひます。とりあえず最初ですので、基本的にフリーに、時間の方も1回の御発言は3分ぐらい、余り長いとほかの方が困るので、それだけ気をつけていただければ、もう中身は自由に御発言いただきたいと思ひます。どうぞどなたからでも御発言をお願いします。

どうぞ。

○委員 国力がだんだんと落ちていく中での影響力をどう維持していくか。つまり、影響力への転換能力をどう持つかという御指摘について、それをうまくやっている国というのは世界の中でごらんになっていて例えばどういう国をお考えになるのでしょうか。

○部会長 どうぞ。

○部会長代理 例えば、先ほど大国派か中規模派かという話がありましたが、それでいきますとミドルパワー系の話になってしまうかもしれませんが、さほどの国力はないにもかかわらず、多国間場で議題設定し、そしてそのアジェンダを実際に通してしまうような力を持っている、例えばカナダであるとかヨーロッパの諸国というのがそれに当たるかと思ひます。このような諸国は大変外交力が勝っており、熟練した多国間の外交作業といったものから学べるころはあるのではないかと思ひます。

○部会長 その点、私も興味があるので、せっかくだからもう少しお伺ひしたいのですが、そういった中規模ないし場合によっては諸国と呼ばれる国は、リソースは限られているわけですね。それではなくていろんな裏の取引や交渉もうまくやる能力は人材ということでしょうか。結局どういう点に強みがあるということなのですか。

○部会長代理 私もこの分野の専門家ではござひませんが、私が数少ない事例で実

際に研究している対象を見る限りでは、1つは非常に人材というものが大事です。非常に基礎的なレベルでは、語学力の部分ではまず何の問題もなくコミュニケーションもとれるということです。ただ、それだけでは勿論十分ではなく、人的なネットワークというものを縦横無尽にめぐらせているというところにあるかと思います。

実際、日本がうまく多国間の交渉などでアジェンダを通したような例を見てみますと、そうした人的なネットワークというもの、それは例えば個人的なレベルでのネットワークであったりするわけです。人材は非常に重要ではないかと思います。それは1つの可能性としてあるかと思います。

○部会長 ありがとうございます。ほかにどうでしょう。どうぞ御自由に、今の点に関係しても関係しなくても結構です。

どうぞ。

○委員 平和やフロンティアというと前向きな話というのは勿論そうなのですが、その前提として、その障害となっている脅威認識というのを議論していくというのがまずあるかと思います。

人口動態だけで悲観論に陥るべきではないという話や、人口ボーナスという話がありました。私もこの脅威認識、特に人間の安全保障の観点から人口の問題について申し上げたいと思います。

例えば一昨年頃にも、途上国の人たちが小麦価格上昇によりパンが買えず、大規模なデモを起こしたり打ち壊しをやったりといったニュースを目にする機会がありました。

こういったニュースの解説では、悪天候による小麦の不作に問題を帰していましたが、これは突き詰めて考えると、いわゆる経済のショックアブソーピングの機能というのがますます落ちており、今後こういった環境問題が経済に非常に大きな影響を及ぼしていくのではないかと思います。また経済学でいうところの資源の有限性、経済成長の制約要因とされるものですが、これはさらには経済のみならず安全保障上においても不安定要因となっていくのではと思います。

もう一つ、人口や環境問題に関連して申し上げますと、例えばこの2050年頃には温暖化の問題が安全保障上の脅威としても無視できない問題になっているのではないかと感じます。

例えば仮に海面が数十センチ上昇するだけで、沿岸部に居住するアジアのかなりの人々が移動を強いられることになると言われていています。日本のような社会では秩序ある移動というのは可能でしょうが、東アジアの多くの国ではそういったオーダーリーな移動は必ずしも起こり得なくて、これは間違いなく社会の不安定要因になり得ると思います。先ほどの資源価格の上昇の問題と、こういった人口の大移動ということを考えますと、必ずしも人口増ということが経済力、国力の前提ではなくて、逆に制約要因になり得るということもあるかと思います。

GDPをそもそも経済力を測るための前提にするのかどうか、というのはほかの部会等で

も話されるのかと思いますが、経済力というのを必ずしもグロスの値ではなく **per capita** で考えていかないといけないと思います。先ほども言及があったゴールドマン・サックスのレポートで示されているような **GDP** の相対的な低下に必ずしも悲観的になるべきではなく、人口減少や増加の問題と併せて注意深く見ていく必要があると思います。

○部会長 ありがとうございます。資源なり環境制約あるいはそれに伴って海面上昇などが起きたときの大規模な人口移動など、国際政治の分野では、いわゆるグローバルガバナンスというようなテーマに関わるのかと思います。そういったようなテーマについて、少なくとも私のプレゼンテーションでは余り触れていなかったのですが、これも改めて皆さんからの御意見を聞いていて提言に反映させていただきたいと思います。

地球温暖化の問題は御存じのように日本の中でもかなり **Acrimonious** なディベートがあり、温暖化が起きているのかどうかということについても議論があります。事実の問題として日本が出している温暖化ガスというのは、世界の中ではかなり少なくても4%とかなので、日本が半分に減らすというコミットメントあるいは8割減らすというコミットメントが世界のそういう状況にどれぐらいプラスになるのかというのは、正直私自身は多少疑問もあるのですが、先のことでわからないことがありますし、世界の科学者の大半が言っていることだから信用しなければ何を信用するのかという話にもなるので、そういう意味では一定の前提を置いて考えるべきことだと思います。

そういうことを 2050 年の世界というのをイメージしたときに、人口や経済だけではなくて環境変動というものが念頭にあって、それにどう対応するかというのは勿論重要なテーマだと思いますので、この点についても議論を深めていければと思います。

どうぞ。

○委員 人口と食料の問題というのは、多分もう一つはマーケットの問題というのが大きくなっていくだろうと考えています。つまり、これから人口爆発が進んで需要が増え、新興国が豊かになっていく中で食料の生産というのは限られるわけですから、グローバルに取引される穀物マーケットで非常に高い価格が付いている。それが結果として貧しい国に食料が回らないという状態、高いものでも買えるという国には食料が回るというある種の格差の問題というのがそこに発生する。これが様々な暴動や「アラブの春」を引き起こしたように、非常に大きな問題になっていくだろうと思います。

それをもう少し抽象化して話をすると、今のユーロ危機などもそういうところはかなりあるのですが、これから政府のマーケットに対するコントロール能力がだんだん減っていくというのでしょうか、政府のコントロール能力というのがいろんな意味で市場のグローバル化に対応しきれなくなってくるということの1つの表れが食料であり、そういうトレンドが今あって、それは逆回転しないような気がしています。

ですから、この平和のフロンティアというのは少なくとも内閣府という建物の中でやっていますから政府が何らかの働きかけができるということを前提にしていますけれども、同時に政府がもう既にコントロールできずに、ある種の負け戦ではないですけれども、デ

ィフェンシブというか、何か向こうからやってくるものに対応していくような形で問題が設定されているような傾向がこれから見えてくるのではないかなということも印象にありました。

○部会長 ありがとうございます。お伺いしたいのですが、食料とか農業とかそういうことはどちらかの部会で議論されるのでしょうか。

○フロンティア分科会座長 経済は繁栄のフロンティアという部会があります。叡智というのも少し横ぐしですけども、メンバーとしてはその両方にいらっしやると思います。第一義的には今のような経済の文脈で考えれば繁栄のフロンティアです。

○部会長 ありがとうございます。また全体会合というか分科会でそれぞれの部会の長の方にも伺ってみたいと思います。今のお話でも資源問題は勿論いろいろあると思いますが、食料問題はかなりトピックとしては大きいだろうと思いますし、日本自身の自給の問題というのもあると思いますが、世界規模での食料資源の問題にどう対応するかということもこの平和の部会の課題と重なってくると思いますので、改めて御意見ある方はまた御発言いただきたいですし、全体分科会としてもこのテーマを検討していただければと思います。

ほかにいかがでしょう。今の点に加えて、あるいは別の視点から基本的な現状認識が部会長はとんちんかんだというような御発言でも歓迎いたしますので、どうぞ積極的にお願いいたします。

どうぞ。

○委員 またちょっと即物的になってしまうのですが、先ほどご発言がありました日本が米中の間にある国だというお話について。

人口や食料問題がたくさん取り上げられました。これに加えて、やはり「平和」という以上、実際に仲良くする相手があったり、今の社会の諸条件、2050年になった時のそれぞれの国や地域の個々の条件や情勢がどうなっているのか、という問題があるのだと思います。日本が置かれている地理的な条件としては、隣に朝鮮半島があって、中国があって、ロシアがあって、という状況はそう簡単には変わらない。南西には東南アジアがあると。

それらの国が、例えば2050年だとちょっとイメージしにくい面がありますが、13年後の2025年というとうとうどうなっているのでしょうか。少しイメージしやすいというか、それぞれの国で、先ほどの人口ボーナスなどの状況もありますが、朝鮮半島は統一されているのかとか、その時の政治的な状況とか、中国がもっと軍事的にお金を使っているのかとか、そういう状況もあると思います。それぞれ「日本がこの位置にある」ということを条件に隣の国々もあって、もちろんアメリカもあります。

それぞれの国が政治的にどうなっているのかということは、「平和」という以上、簡単な言葉で言うとうまくするということだと思うのですが、考えるファクターとして重要なのかなと思うのです。2050年だとちょっと先で、そこから戻ってくるということなので、なかなか予測しにくいですが、この地球のここに日本の位置があって、いろんな国際関係が現在ある。それが将来も発展していく。そうすると、日本の将来の政治もそうで

すし、そして特に中国、そしてアメリカだと思うのですけれども、どんな政権になっているのかという、そういうような政治状況を具体的にイメージして議論することも大事なのかなという感じがします。

○部会長 ありがとうございます。1つは、地理的条件は数十年程度ではそう変わらないので、2050年でもそういうところは変わらないであろうということですし、それは中国が2050年にどういう国になっているかというのが何かのついででわかったら、我々はいかに安心というか、将来についてそれなりの見通しが持てるだろうというのは皆さんお感じのところではないかと思います。

中国御専門の高原先生が本日御欠席なので、御出席のときにまたそのことも、高原先生は2050年の中国は何をおっしゃるかよくわからないですが、御発言をいただきたいと思っています。

御発言はありますか。

○委員 先ほど、御発言がありましたが、私も2025年まで周辺国がどう出るかということとはかなりきちっと押さえてかかるべきだろうと思います。

その場合、やはり中国が力を伸ばして近代化の果実をとりたいと思うならば、どちらかといえばステータスクオ・パワーでなくてリビジョニスト・パワーになるのでしょうか、これに対して受け身で回るのか、それとも秩序形成の側に自分たちが立つのかというのは大変大きな日本の国の方針の選択肢だと思います。

それを申し上げた上で、2050年を考えるのが面白いなと思いますのは、非常に日本として珍しいことに、これはシナリオライティングを実際にはやろうとしているのだと思うのです。私は下手は下手なりに、このコメントではシナリオを書いたつもりです。非常に悲観的なシナリオと楽観的なシナリオと両方書いたのですが、ロイヤル・ダッチ・シェルが積み重ねてきたこのエクササイズ、シナリオ・ライティングというエクササイズの勘所は、「見出し」と「ナラティブ」なのです。要するに見出しというものを付けて、一言で人々の関心を引きつけるということと、物語になっているということです。アイテムを列挙して、こうなるからこうなるというものではなくて、物語として人々のイマジネーションを喚起するということにこのシナリオ分析の要諦があるのだそうでありまして、可能ならこの部会あるいはフロンティア分科会全体で、こういうシナリオを示して見せるという、それによってみんなに考えてもらうということです。そういう役割を果たせば、私たちはいいことをしたなということになるのではないかと思います。

○部会長 どうもありがとうございます。実際、報告書はキャッチフレーズなりビビットなイメージということを強調されていて、これも私の能力外のことだと思って見ていたのですけれども、いい意味でのジャーナリスティックなセンスといいますか、表現力というのは確かにこういう将来イメージなりデザインを考える上では重要だと思います。

ですから、これも勿論、委員の中ですばらしいアイデアを既にお持ちの方もいらっしゃるかと思いますけれども、できればこの場で議論して、1つのキーワードなり1つのイメ

ージを練り上げていければいいなと思います。

2025 年の中国はまた別途というか、改めて議論するとして、2025 年の朝鮮半島についてはどう見ておいたらいいか、先ほども少しお話もありましたが、本当に気楽な形で結構ですので、イメージをお話しただけかもしれません。

○委員 それはだれにもわからないことなのですけども、人の交流は可能になっている可能性は極めて高いと思った方がいいと思います。国としては分かれているかもしれないけれども、人の交流ぐらいはできるレベルまで行っている可能性というのは十分あると思うのです。

韓国は、北があるので実際に今までの心理的な地政学では島だったのです。しかし、北の問題が転換すれば、いよいよ彼らは中国と向き合っていくことになるのです。そうすると、ますます朝鮮半島というのは伝統的に我々が中国のバッファーになってやっているから日本はあんなのん気にやられていられるのだと思って行くでしょう。その時にまた南北の一致するアイデンティティを求めていくので、それを反日に向かわせないようにするのは非常に重要な課題になっていくと思うのです。とりあえず北の人がだれでもわかりやすいのは反日、反米ですし、それを共有している人は少なからず南にもいるわけで、日本はヨン様にはまったりとかして考え方が甘くなっている場合ではないと思います。

私は中長期にわたってこのぐらい考えていくと、今後 40 年ぐらいの間に起きてくることというのは、人間のこれまでの人智では考え得ないような統制不能なことが頻発して行く気がします。それは現在、金融の世界で起きているわけですが、いずれ、生命倫理とか医薬、情報、原発とかエネルギーの類と環境、こういうところで想像不能なことが起きる可能性が高いと思います。そうすると、それに対応できた柔軟性を持ったところだけが新たにルールを仕切っていくということになっていくと思うのです。

そしてそれが国である保証はどこにもないでしょう。依然として国を単位にお考えな方々が結構いっぱいいるのですけれども、国の概念もずいぶん変わっている可能性がある。例えば私の大学もかれこれ 4,000 人からなる留学生を世界中から受け入れています。今、世界で起きていることというのは自分がどんな国にしようともアゼルバイジャンであろうが、ニューヨークから来ようが、みんな Twitter、Facebook でつながっていく世代が大人になっていく世代だということです。国境の概念は非常に希薄。共通体験はいっぱいしており、かつ同じプラットフォームでそれを伝え合う速度はものすごく早いので、我々旧世代には理解不能な国境感というのが生まれてくる可能性はあると思います。人間の考えることはそんなに進歩しないから、ずっと刷り込まれた宗教とか民族教育とか、そういうのは意外と簡単に崩れないのかもしれないのですけれども、今まさに中東で起きている中東の春というのは、そういう意味で非常に新しい実験だと思うのです。だから、余り国境だけをがちがちに考えていても、2050 年の世界にはついていけないかなと。

依然として国境は恐らく残っていると思いますけれども、その形というのはすごく曖昧、アドホックな感じになっていく可能性というのは大きいと思います。今ヨーロッパが問わ

れているのは国境そのものです。経済だけは統合したけれども、国境は残っていましたというこの修復を何とかつじつまを合わせようというプロセスなので、こういうことは別にヨーロッパだけではなくてこれからいろんなところで起こってくると思います。

○部会長 私はできの悪い政治学者なので国境にこだわり過ぎているかもしれないですが、確かに国境なり我々が前提としている主権国家の概念というのは、要するに軍隊と税金を賄うメカニズムとして、あれが都合がよかったからヨーロッパで発達して世界に広まったのだと思うのですが、今、世界を見てみても、税金を取るのにどこの国でも四苦八苦しているわけです。ですから、税金の所得税とか消費税の方がまだ取りやすいのでしょうけれども、そういう形で取れなくなってくると主権国家というのもかなりのところの役割を失っていくということになるかもしれません。2025年であればまだ主権国家はかなり政治の枠組みとしてはそれなりに役割を残しているだろうと私自身は思いますけれども、2050年になると考え方の幅があると思います。一方では、今おっしゃったような主権国家なんてかなり以前に忘れてしまってそれで差し支えないという世界になっている可能性もあるかなという気はします。

中東の春、アラブについては、今日、これも本日御欠席の池内委員がまたいらっしゃっていただけたと思いますので、それこそ現状のビビットな話をいっぱい御存じだと思いますが、そういうことを踏まえて 2050 年のイスラム地域の話もお伺いしたいと思っています。

どうぞ。

○委員 シナリオプランニングについてはお話がありましたように、本当はもうちょっとちゃんとそれこそ国家戦略室でそういうものをずっとやっているべきようなことで、それをやるだけでも大変なことだと思うので、ある意味ここでやることはその簡易版にしかないのかもしれないかもしれません。

私には特にその後の部分のフロンティアの方をどういうふうに位置づければいいのかというのがよくわからなくて、私がコメントで書いた中にもアジア太平洋という、どこに焦点を当てて外交をするかという話と、インテリジェンスをどうするかといったような、日本が余りやっていない領域といいますか、力を入れていないけれども、力を入れていけばぐんと伸びるのではないかという領域とをまぜこぜで書いています。平和のフロンティアといった場合には、それこそ「自由と繁栄の弧」は、ある種日本の外交のフロンティアを示す1つのコンセプトだったと思いますけれども、そういうものを考えればいいのか、それともどんな状況でも対応できるようなフレキシブルな体制を考えていくということなのか、どちらの方と考えればいいのかというのが迷うところで、部会といいますか、分科会全体に関わるころかなという感じがいたします。

○部会長 御発言はありますか。今のフロンティアということで言うと、宇宙も関わるかと思いますが、それも含めて御発言をいただければと思います。

○委員 今、まさに質問されたことと同じようなことが私も印象としてあって、まずシナ

リオプランニングをするにしても何を前提にするのかということで大きく変わってくると思うのです。先ほどおっしゃったような主権国家の存続とか変容ということまでも前提に含めない発想でいくのか。これはフロンティアという意味では非常に新しいというか、今まで我々の考えていないことを考えるわけですから、そういう意味でのフロンティアといえるかと思います。

もう一つは、宇宙というのは確かにフロンティアなのですが、それは多分技術的なフロンティアであって、それはある種直線的に、例えば月の次は火星とか設定できるものなのですが、平和というのはそういう直線的な世界ではないのです。戦争から必ず平和に行くという方向でもないし、必ず逆戻りもありますし、技術というのは不可逆性がありますので、一旦伸びるとそこからは下がってこないのですけれども、フロンティアというと、何に対してフロントしているのかというのが平和の場合、ちょっと何を目指していくのかというのはわからない。

つまり、知的に主権国家という概念まで吹っ飛ばして新しい知的なフロンティアを目指すのであればわかるのですが、実際の政策としてフロンティアということになると一体どこがフロンティアなのだろう、何に我々はコンフロントしているのだろうかと思うとわからなくなってきました。先ほどの御意見を踏まえて、私も主権国家はこれから変わっていくと思うのです。なくなりはないと思うのですけれども、かなり性格的に変わってくるので、ある種、法的な役割と経済的な役割とでどんどん分化していくものだと思っていますが、その辺も含めて、どこに向かっていくのかというのがもう少しはっきりしていると議論しやすいかなと思います。

○部会長　だんだんそうやっていくと泥沼の戦いになってしまいそうな気がします。正直、私自身は今の御疑問にお答えすることはできません。平和のフロンティアとは一体何なのだろうと私自身も思っているのですが、もし平和のフロンティアという言葉に込められた意味ということでお話があれば御議論いただいて、それで今日の意見交換は終わりにしたいと思いますが、いかがでしょうか。

○フロンティア分科会座長　まさに中身全体を議論していただきたいということでありますけれども、出てくる話題としては今日皆さん御議論していただいた中にキーワードがかなりあるのかなということで、そういう点では準備したものと皆さんとの議論との間で余り大きなずれはないと思うのです。

最初に御紹介いただいた私のメモのどう考えていくのかということでもありますけれども、手元にも資料がありますが、一方で日本再生の基本戦略というのが動いているわけです。これが基本戦略の下に当面の政策を考えるということで、現状から将来に割と身近な 2020 年ぐらいを目指した議論をしているわけです。

このフロンティア分科会の方は少しそれと差別化をする必要があるということで、冒頭のように 2050 年というのを設定して、それからバックキャスティングで少し加工させて、その 2025 年ぐらいの姿というものに現状からどう到達するかということを最終的には議

論していこうということも考えたわけです。

バックキャスティングでは将来像というのが環境などでよくやりますけれども、現状とは余り関係なくて、地球の温度上昇がある程度以内にとどまらなければいけないということから将来像というのを設定するというやり方もあるわけですが、少し足が地に着いた議論の上に将来像というのは考えるべきだということで、現状から起こっていく変化というのを 2050 年ぐらいまである程度想定して、それが起こり得る将来像で、そこにいろいろ問題があるので、そこから少し飛躍させてあるべき姿というのを考えてみよう。

その距離感というのは曖昧なところがあって、それぞれのところでどう議論していくかということだと思うのです。いずれにしても、論理的に起こり得る将来像から全くかけ離れたあるべき将来像ではないのだということで、地に着いた議論というのを考えようということですが、既に今日の中でもそれに相当幅があるという感じがあるのです。その辺はまさにどういうふうに議論するのか、あるいはシナリオが 1 つではなくて 2 つ要るのだということもあり得ると思います。それが何となく整理できると 2025 年、13 年先ですからそんなに遠くではないわけですが、その辺りの姿というのを想定して、そこに向かう政策の体系というようなことが議論されると思うのです。フロンティアというのはそこに出てくる言葉で、一番そのときの核になる政策の方向性は何かというのをフロンティアと私自身理解しているのです。だから、在るべき姿に到達する最も重要な方向なり取るべき施策の方向というのをフロンティアと考えたいと理解しているのです。

それは私の理解で、そんなことをほかの部会でも申し上げようとは思っているのですが、そうではなくてシナリオが 2 つ要ると、だから、仮定の上の将来像になるのだという結論になるところがこういうところであるのかもしれない。その辺は議論にお任せしたいと思っています。

○部会長 ありがとうございます。聞けば聞くほど難しいなと正直思うのですが、これから皆さんの御意見を更に聞いていく過程でうまく煮詰まっていくということを部会長として切に希望を抱いております。

それでは、時間の方に参りましたので、本日会合の方はほぼ終わりにしたいと思います。

次回以降、部会長代理と私以外で 12 人のメンバーがいらっしゃいますので、第 2 回から 4 回まで 3 回で 4 人ずつプレゼンテーションしていただいて、その後、ディスカッションするという形でお願いしたいと思います。

次回につきましては、私の判断で、本日御欠席の渡部委員と神保委員にまずお願いをしました。残り 2 人ということなのですが、これも完全に私の裁量で恐縮なのですが、かなりこのシナリオ等を既にお考えになっておられる谷口委員と金子委員にあと 2 人お願いをして、谷口、神保、金子、渡部の 4 人の委員に次回はプレゼンテーションをお願いすることによってよろしいでしょうか。いきなりで申し訳ないのですが。

○委員 コメントをつくってお話するということですか。

○部会長 コメント以外に、改めて別のものをつくっていただく必要はありません。ただ、

別途のものを入れたいということであれば別途の形でも結構です。基本的に時間はお一人 15 分程度お話をいただいて、4 人ですので 1 時間ということで、残り 40 分程度意見交換ということでやっていきたいと思います。よろしいでしょうか。

3 回、4 回については御出席の方の予定と話のテーマについて、できるだけシンクロさせたいと思いますので、私の方でちょっとまた検討させていただいて、事務の方から御報告の日程についてまたお願いを差し上げることにしたいと思います。そういうことで皆さんまた改めてプレゼンテーションの方をよろしく御準備ください。

それでは、時間になりました。次回は 2 月 17 日、時間は 17 時からです。

詳細については事務局から追って御連絡をいたしますので、よろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。